

筆者は、伝統的社会では、「文化」を社会的な行動様式や社会的な制度などのもとで組織された人間の働きや思想が生み出す一つの総体としてとらえるという。一方、近代社会においては「文化」を「知的、芸術的な活動」に限定して考える。しかし、自然環境の考察は、単に後者の「文化」を狭義にとらえることだけでなされてはいけない。自然環境は「文化」のとらえ方や自然環境に対しての人間の歴史的関りに留意して考察されるべきと考えている。

課題文は、自然環境に対する民族のとらえ方には差異があり、インディアンの人々は大地を兄弟とみなすのに対してヨーロッパ人は自然を敵で征服するものとみなすと指摘している。これは、まさに地球上で繁栄を享受してきた先進国における自然観こそが、現在問題になってくる地球温暖化の根にあることを示唆している。

日本では、自然は地震や台風などによる災害と一体化され意識されてきた。それらは日本人の中に自然を征服すべきものというよりも天から与えられる防ぎようのない脅威として受け止める気持ちを育み、自然に対する人間の卑小さへの自覚を生み、災害に遭っても謙虚に耐え

抜く価値観を醸成した。その意味で、近代社会以前の日本人は北ヨーロッパ人のように自然環境を征服すべきものとして敵視するのではなく、稲が実ったら神殿に献上したり、豊作を祈願するなどの祭祀を執り行ったりすること、大いなる自然の懷で祈りながら皆で助け合って生きるという姿勢を貫いてきた。その頃の人々は地産地消を大事にし、儉約しながら自然の恵みをいただくという意識をもっていた。しかし、欧米から産業社会の波が押し寄せ、近代化が進み高度経済成長が日本社会を席卷していく中で、欧米的な文化に根差した自然観、つまり自然を利用するという視点が常識的な価値観となつて今の日本人の消費型社会が現出した。それは二酸化炭素の排出による温室効果ガスの増大を生み、地球規模での動植物の生存にまで影響を与える事態へと発展している。いわゆる環境問題を解決することは、単に脱炭素社会への転換を進めるといふ技術的側面だけでなく、失われつつある総体としての「文化」を今一度見直し復権しようとする努力ぬきには実現しないものである。私たちに根づいているはずの大自然の下にあつて「足るを知る」といふ謙虚さに立ち戻りたい。